

simc News Letter

Sendai International Music Competition

2023年6月20日号

仙台国際音楽コンクールニュースレター

特別企画「野島 稔メモリアル」の開催が決定しました。

第1回～第7回のピアノ部門審査委員長、2020年1月より運営委員長をお務めくださり、2022年5月9日にご逝去された野島稔先生を偲んで、下記2つの公演を実施いたします。チケットはいずれも2023年11月一般発売予定です。詳細は、後日公式サイトにて発表いたします。



©YOKO SHIMAZAKI

(1) もっと教えて野平一郎先生～鍵盤楽器の歴史と魅力～

<日時>2024年3月30日(土) 14:00 開演
<会場>日立システムズホール仙台 コンサートホール
<出演者>野平一郎

第9回仙台国際音楽コンクールピアノ部門審査委員長 野平一郎先生をお迎えし、鍵盤楽器の変遷や現代ピアノの魅力のお話と、ポジティブオルガン・チェンバロ・ピアノの演奏をお楽しみいただきます。

(2) 中野りな&ルウオ・ジャチン デュオリサイタル ～第8回仙台国際音楽コンクール優勝者による夢の共演～



©kiseki michiko

<日時>2024年3月31日(日) 14:00 開演
<会場>日立システムズホール仙台 コンサートホール
<出演者>中野りな (ヴァイオリン)
ルウオ・ジャチン (ピアノ)

2022年第8回コンクールの覇者、2人によるスペシャルコンサート。同一回の優勝者によるデュオは初めてのことで、まさに夢の共演が、ここ仙台で実現します。目覚ましい成長を見せる2人の演奏にどうぞご期待ください。

ルウオ・ジャチン ピアノリサイタル【東京公演】演奏評 寺西 基之 (音楽評論家)



©T.Tairadate

昨年開催された第8回仙台国際音楽コンクールは、様々な国から優秀な人材が多数参加し、会場も賑わいを見せて、コロナで停滞していた音楽界に力を与えるような盛り上がりを見せた。内容的にもきわめて充実しており、筆者が聴いた3日間にわたるピアノ部門ファイナルは高レベルでの競演で、野平一郎審査委員長が表彰式でいみじくも述べていたように「若手ピアニストのミニフェスティバル」の観があった。

そのファイナルで屈指の難曲であるプロコフィエフの協奏曲第2番を鮮烈かつ華麗に弾いて見事栄冠に輝いたのが中国のルウオ・ジャチンである。ブラームスの協奏曲第1番で成熟した名演を聴かせたドイツのヨナス・アウミラーとの接戦を制しての優勝で、全く違うタイプの2人のコンテストのうち、技巧派のヴィルトゥオーゾ・タイプのほうが選ばれたという印象があった。しかし野平委員長が囲み取材で語ったところによれば、ルウオは予選からファイナルまで技術と音楽性の全てにおいてパーフェクトで、技巧だけを評価したわけでないとのこと。ファイナルしか聴いていなかった筆者にとって、今回約1年ぶりに行われた優勝記念リサイタルは、その意味で彼の実力を確かめる絶好の機会となり、改めて彼が技巧だけでなく秀逸な音楽性を持った逸材であることを認識させられることとなった。

勿論ルウオが研ぎ澄まされた技巧の持ち主であることは間違いない。指の敏捷さ、強靱な打鍵、芯のある音。まさにヴィルトゥオーゾの美質を持った俊英だ。しかしそうした特質が名技の誇示に向かうことなく、あくまで作品の濃やかな表現、音色や響きの多様なパレットを最大限引き出すために巧妙に使いこなされている。今回のリサイタルでそのことが特にはっきり現れていたのがスクリャービンのソナタ第7番「白ミサ」と第9番「黒ミサ」だった。「白ミサ」は激しい情念的な動きから憧憬のような柔らかい官能性まで、響きが実に多様で変幻自在。「黒ミサ」では第1主題の神秘的な雰囲気と第2主題の不思議な静謐さの性格付け、妖しげな響きの重なりがやがて渦を巻くように強烈さを加えていく展開の仕方などが見事だった。

スクリャービンに先立ってプログラム冒頭にはシューマンのソナタ第1番が置かれていたが、この曲をルウオはコンクール予選でも弾いており、お気に入りの作品なのだろう。いわゆるロマンティックなシューマンではない。楽章間の間(ま)をほとんどとらなかったことに現れていたように、全体を一つの勢いのある前進的な流れで運ぶことで全曲を緊密に纏め上げ、それによって緩みのない緊迫したドラマを生み出していく。特に第3、4楽章は一気呵成に進めた感があったが、その中で微妙なアゴークやダイナミクスの変化もよく考えられていた。勢いはあっても決して情熱に任せた演奏ではなく、細部の表情まで考慮した上での造型である点に非凡さが窺える。

休憩後のフォーレの5曲の小品も実によく彫琢されていた。フランス風のエスプリやサロン風の洒落さではなく、コンサート向けの本格的なロマン的楽曲としての側面を前面に出した演奏といえようか。とかく軽妙に弾かれがちの「ヴァルス・カプリス第1番」や「即興曲第2番」も力強い起伏をもって表現され、「舟歌第1番」では舟歌リズムのたゆたいよりも旋律をくっきり浮かび上がらせることに主眼を置く。「ノクターン第6番」の高音域の旋律の歌わせ方、「ノクターン第8番」におけるアルペッジョの溶け合わせ方など、響きを綿密に作り上げ、情感豊かでありながらそれに溺れず、曲全体を明晰に俯瞰しながら、自分なりのフォーレ像を描き出そうとする姿勢に迷いが無い。

プログラム最後は十八番のシュルツ=エヴラーの「『美しく青きドナウ』によるアラベスク」で、ここではヴィルトゥオーゾとしてのルウオのエンターテイナー的な面が全開に。アンコールのショパンのマズルカ、モシュコフスキの「スペイン奇想曲」、シューベルトの「楽興の時第3番」もそれぞれの作品の性格付けにルウオの表現力の多面性が示されていた。

全体通して練り上げた表現でもって自分の音楽をしっかりと打ち出すピアニストで、なるほど第1位の栄冠も頷ける。これからどう成長していくか楽しみである。

ルウオ・ジャチン ピアノリサイタル【東京公演】

日時:2023年5月24日(水)19:00開演

会場:浜離宮朝日ホール

演奏曲目:

- ・シューマン:ピアノ・ソナタ 第1番 嬰へ短調 op.11
- ・スクリャービン:ピアノ・ソナタ 第7番 op.64「白ミサ」
- ・スクリャービン:ピアノ・ソナタ 第9番 op.68「黒ミサ」
- ・フォーレ:ヴァルス・カプリス 第1番 イ長調 op.30
舟歌 第1番 イ短調 op.26
即興曲 第2番 へ短調 op.31
ノクターン 第6番 変ニ長調 op.63
ノクターン 第8番 変ニ長調 op.84-8
- ・シュルツ=エヴラー:ヨハン・シュトラウスの「美しく青きドナウ」によるアラベスク